

## 【エッセイ・回顧】

## 丸山薫先生を偲んで―師の印象と学生への温情―

愛知大学文学部文学科 昭和 62 年卒 久野 かおる

## 1. はじめに

丸山薫と言えば、昭和を代表する詩人であるが、私は丸山薫先生が愛知大学で教えていらっしやったことも知らずに愛知大学に入学した。何かのサークル活動に参加したいと思い、短期大学部に女声合唱団があり、学部生も入れたので、入団した。そして先輩から短期大学部の学生歌「梢の歌」の作詞者が有名な詩人、丸山薫先生であり、愛知大学の教授だったことを教えられ、驚いた。

2019年12月15日に、短期大学部創立60年を記念して旧短大本館跡地に設置された「梢の歌」詩碑の除幕式があり、女声合唱団OGの一人として「梢の歌」を合唱させていただいた。これについての詳細は、愛知大学短期大学部同窓会実行委員会の山口恵里子氏が愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.28』（2020年3月）に記録をまとめられている。また、愛知大学企画部広報課編「愛知大学通信 VOL.217」（2020年3月）にも短期大学部安智史教授による丸山薫先生の解説や「梢の歌」の歌詞とともに紹介されている。

昨年、「丸山薫先生顕彰を考える会」が発足した。会の代表であり、卒業生として「本間喜一先生顕彰会」名誉会長など長年にわたって愛知大学への支援を続けてこられた越知専氏と女声合唱団の大先輩である藤城佐知子氏から会の発足についてのお話を伺い、お二人に同行して、まず丸山薫先生が眠

る正太寺を訪れ、大河内悟道ご住職のご案内でお墓参りをさせていただき、ご住職のお母様からも丸山薫先生のお話を伺うことができた。次に、文学専攻科一期生、俳人で句集「景象」を主宰していらっしやる星野昌彦先生を訪ね、お話を伺う機会を得た。

折しも、NHK朝のテレビ小説（朝ドラ）「エール」のおかげで、作曲家古関裕而氏と豊橋が注目の的となっていた。確かに「豊橋市歌」の作曲者は古関裕而氏だが、作詞には丸山薫先生が関わっていらっしやる。なぜ丸山薫先生を取り上げてくれないのか。私の勝手な思いであるが、「梢の歌」は、学生歌にとどまらず、新型コロナウイルス感染拡大による鬱々とした毎日、不安を抱え生きる私たちへのエールでもあると思うようになった。そして丸山薫先生は愛知大学でどのような先生だったのか知りたくなった。

## 2. 丸山薫先生の印象

丸山薫先生の詳細は、『四季 終刊 丸山薫追悼号』（潮流社 1975年）所収、潮流社社長、八木憲爾「覚え書」にあり、愛知大学丸山薫の会編『丸山薫の世界（丸山薫作品集）』（2017年）「丸山薫略年譜」とともに参照したい。

丸山薫先生に一度もお会いしたことのない私が先生の印象などわかるはずもないが、『丸山薫全集 5』（角川書店 1977年）所収の「書簡」を読むと、ご自身の近況（体調、

飲みすぎて終電に乗り遅れた話など) や贈り物への感謝などから先生の生活が垣間見え、また相手への返信を欠かさない律儀な方だということもわかる。

『四季 終刊 丸山薫追悼号』所収、八木憲爾「覚え書」(p.333) に、

あなたは日記をつけなかったが、手紙は実にこまめに書かれた。来信には必ず返事を出された。だから、あなたの手紙を保存している人は多いだろう。

とある。さらに八木氏は『丸山薫全集 5』の解説 (p.424) に、

丸山さんは大きな人であった。人間が大きかった。大きなものの重々しさ、厳しさ、優しさがあった。だから人はその傍で安堵し、ときに怖れ、また甘えることができた。けれども大きなもののそのなかでは、大きな虚しい悲哀に耐えていた。愛にみちた手紙もそこから生まれた。寄せられた書簡は二千通。人からのたよりに、必ず返書を出す几帳面な性格にもよるが、その手紙がながい年月、大切に保存されているのは、丸山さんがいかに慕われ尊敬されていたかの証である。

と記されている。

さて、丸山薫『蟬川襍記』(潮流社 1976年) 所収「鮎」(p.22~p.23) に、「中国にだってアユはいるらしいが、日本のものほどにはおいしくないだろう、なんだかそんな感じだナ。」には先生の表情が感じられ、好きな表現である。

丸山三子『マネキン・ガール 詩人の妻の昭和史』(1984年 時事通信社) p.34 に、「机に向かっているのにあきますと、薫はぷらっと散歩に出かけます。日課の散歩では、動物園に自然に足は向くようでした。動物園の好きな薫なのです。」とある。同書には、先生がお酒好きであったこと、ご結婚に至る大胆な展開、萩原朔太郎をはじめ多くの交友関係があり、毎日のように来客があったこと、先生ご自身が奥様のマネキン・ガールの仕事を見つけてきたこと、先生の晩年のことなどが書かれていて、興味深い。同書 (p.255) の「あとがき」にある「薫は地味な詩人でした。自らを売ろうとする姿勢はなく、ひたすら詩作し、茫洋たる海をはるかに見据え生きつづけました。」という奥様の言葉が心に響く。星野昌彦先生がおっしゃっていたが、「丸山薫先生は普通の人、美化されているが、私たちと同じ地続きにいる人」であったのだろう。

先生はご自身について『蟬川襍記』所収「私と詩友」(p.104) に「生来が非社交的であり、時としてわれながらミザントロピクとも思えるほど自分の世界に閉じこもりがちな私」とあるが、同書 (p.159~p.160) に津村信夫氏 (詩人) の第一印象として、

雑誌を創める少し前に不意に私を訪れてきたこの学生服姿の、いわゆる慶応ボーイらしくない内面の落ちつきと厚みに接して私はたちどころに好きになった。理由はもう一つ、彼が私に好意をもっていることを直感したからでもある。誰しものことだろうが、とくに非社交的な私の場合、親交を結ぶ相手とはいつもそうした最初の感情の交流が介

在する。

とあり、来るもの拒まずではないが、先生の交友関係は幅広く、その懐の深さを感じる。それは『四季 終刊 丸山薫追悼号』に寄稿された名だたる方々の文章から伝わってくる。例えば、先生が山形に疎開するきっかけとなった日塔聰氏（詩人）は同書「丸山薫断想」（p.58）で次のように述べている。

人に対しても、詩法と同じようなきびしさがあつた。初対面に大きな瞳でジロリと一瞥され、辟易して引き退る人も多かったが、たしかに取りつく島もない強面だった。自分の牙城に人を踏み込ませまいという、拒絶反応もきわめて強かった。しかしこれも、相手がほんとに腑に落ちて定着するまでにかかる手間で、人ざわりのいい応対よりもずっとまっとうな、誠意のこもった応接でもあつた。

以下も紹介する。

「丸山薫全集 月報I」（角川書店 1976年10月）真壁仁（山形の詩人）「予見と幻影」（p.5）に、

岩根沢国民学校での丸山さんはどんな先生だったか。職員室などでは無駄口をきかず、へつらいも、なれあいもきびしく拒んだ人柄は、なかば畏れられ、そのおかしがたく、はかりがたい力量によって信頼されながら、たぶん、けむたい存在であったろう。けれども子どもたちには、思いやりのふかい、頼もしい先生だったにちがいない。

とある。

「丸山薫全集 月報III」（角川書店 1976年12月）大木実（詩人）「中野新山通り」（p.3）に、

丸山さんはこちらからお尋ねすることには、考え深くゆったりとした口調で答えてくださるが、ご自分のことをご自分から語られるということはなかった。自慢話などまったくなさらなかった。

とある。

「丸山薫全集 月報IV」（角川書店 1977年2月）永井路子（歴史小説家）「校歌のこと」（p.3）に、

その筆跡から、少し気づまりな、こわい方を想像していたのだが、お目にかかってみると、悠々としたおだやかなお人柄で、すっかりうれしくなった私は、調子にのって、やたらにぺらぺら喋ったような気がする。

とある。

先生ご自身は、『蟬川襍記』所収「私と詩友」の p.117 に「私は船が好き」、p.120 に「何によらず、私は感動した文章の一節や詩、それにいわゆる名調子といったものを、しぜんにすぐ憶えこんでしまう性癖があつた。」と記している。続く p.121 には、

戦前、戦中のある時期まで大型分厚の豪華で有名だった某婦人雑誌から、好みの名詩についての鑑賞を頼まれ、萩原朔太郎の「晩秋」と佐藤春夫の「海

の若者」を取り上げた。

とあり、p.181には「私が萩原朔太郎を尊敬し無上に好きになったわけ」を記されている。

ところで、先生は面倒見の良い人だったようで、桑原武夫他編『丸山薫全集 5』（角川書店 1977年）所収 1956年9月14日付渡辺花子様（山形県岩根沢の詩人）宛書簡（p.133）に、「今秋は三組の若い人たちの結婚に関係しました。その内二組は頼まれ仲間です。」とある。

また、先生は、ご自身の詩の解釈について真意を問う手紙に対し、面倒だと思いつつも気になって、丁寧に返信していらっしゃる。例えば、1960年5月30日付芳賀秀次郎様（歌人、詩人）宛書簡（p.191）、1960年6月1日付渡辺花子様宛書簡（p.144）、1969年4月19日付明珍昇様（詩人）宛書簡（p.242）にもそのような記述がある。

『丸山薫全集 1』竹中郁氏（詩人）の解説（p.502）に、

つねに高く翔ぼう、高いところへ登ろう、ひろびろとした処へ出よう。自在な人間性を伸ばそう。これが丸山の一生ののぞみだった。さまたげられれば悲しみ怒り、同調者には友愛を湧かし、たびたび絶望しながらもアイデアとしてかがやかしいものへのあこがれを失うまいとしてきた丸山。

とある。

先生は愛知県豊川市にある医療法人共立荻野病院への入退院を繰り返しながらも創作活動に取り組んでいらしかったようで、

『丸山薫全集 5』所収 1957年4月23日付更科源蔵様（北海道の詩人）宛書簡（p.182）に次の記述がある。

実は昨年の暮から私と友人とで、「パーゴラ」というのんきな随筆雑誌をやっているのですが、これは編集同人が私と友人の愛知大学教授、それに医学畑の二人であり、お医者さんたち（特に精神科医）と文芸方面の人たちに、ごく気楽な随筆を書いてもらうという主旨で始めたもの。

『丸山薫の世界（丸山薫作品集）』所収「昭和四十八年六月十七日 第十三回 中日詩祭講演 私の足跡」には先生が自ら『四季』や萩原朔太郎との交流、どんな詩がよいかなど詳しく語られていて、先生の語り口調が聞こえてくるような気がする。

星野昌彦先生宅で丸山薫先生直筆の色紙と丸山薫先生宅にあったという庭の那智黒石を見せていただいたが、『四季 終刊 丸山薫追悼号』所収、萩原葉子（萩原朔太郎長女、小説家）「丸山薫氏のこと」（p.127）に次のように記している。

庭を見ると黒の玉砂利をいっばいに敷きつめ、京都の寺院のような格調の高い造園であった。美事な石のつやに見とれていると、皇居に納める残りの石だと説明された。粒が揃って、落ち着いた風格はさすがで、氏の詩精神とのつながりをどこかに見るような思いであった。

先生は、きっと毎日悠然たる思いで石を

見ていらっしやっただろう。

### 3. 丸山薫先生と愛知大学

丸山薫先生が愛知大学の教員となられた経緯については、以下のようなのである。

『丸山薫全集 5』所収 1950年4月6日付板倉鞆音先生(愛知大学教授)宛書簡(p.80)に次の記述がある。

余談乍ら、秋葉さんからのお指図により、新学年から、現代詩論を担当いたすことになりました。

また、愛知大学国文学会編「愛知大学国文学」第十三号—丸山薫教授特集号—(1972年12月)所収、後藤紘氏(愛知大学卒業生で後述する「愛知大学文学研究会」会員)による「詩人のくらし 詩のこころ—丸山薫氏に聞く」(1972年8月24日、8月26日、丸山薫先生宅でのインタビュー記録)に次のようにある。

後藤 大学へ出て頂けるようになったのは、豊橋へこられて間もなくですか。

丸山 二十四年の五月からです。文学部長だった秋葉先生という方に連れられて、当時の小岩井学長のところへ行ったのを覚えています。紹介してくれたのは豊川堂(市内大手町の書籍店)の先代の社長の弟の高須氏でした。民間人の起用ということが、その頃盛んに言われて、小岩井学長も考えていたらしいです。

後藤 学校や学生の様子はどうでした

か。

丸山 当初は教養講座と名づけられて、月二回ほど講演みたいに話だけをし、法科や経済の学生も聞きにきてました。一年ほどたって単位制の講座になったと思います。まだ旧制の予科もありまして、学生も種々雑多で、中には復員学生もいたりして、陸ゾル海ゾルなどと言ったものです。

後藤 えっ何のことですか。

丸山 陸軍あがりのソルジャー(兵隊)の略が陸ゾルで、海軍あがり海ゾルというわけです。とにかく侍が多く、バラエティーに富んでいました。まあそのあたりのことは、古くからおられる先生にでもお聞きして下さい。どうもそれより後の現在のことなどは、なんとなく話しにくくていけません。

このインタビューでは、先生の体調、高校野球の話、三好達治氏との出会い、疎開先山形県岩根沢での生活、復刊『四季』についても語られている。そして、詩については「詩は言葉なり」と言うが、「詩は魂」であると語られ、次のようにおっしゃっていて、貴重な記録であると思う。

後藤 やはり何をするにも、心を込めるべきですね。

丸山 私のように詩ばかり書いてきた者が、他の分野のことについてとやかく言うのはおこがましいのですが、まあ長いことやって

きましたから言わせて頂けば、  
どの世界にも共通している心だ  
と思います。訴える者の気魄と  
でもいうか、気持を込めて取り  
組むということが、最後には意  
が達せられるのだという事実を、  
特に強調しておきたいのです。

後藤 いま書いている人、これから書  
こうとする若者には、ぜひ味わ  
って貰いたいですね。

丸山 何を言おうとしているのか訴え  
たいのか、その発想が自身でも  
掴めず、アイデアが先走った小  
手先の技巧だけで、作品を書い  
てしまうということのないよう  
に、若い諸君に願うのみです。

ちなみに、同書には後藤紘氏による山形  
県岩根沢での記録「丸山薫教授詩碑除幕式」  
も記されている。

なお、愛知大学五十年史編纂委員会編『愛  
知大学五十年史 通史編』(2000年9月)第  
II章 (p.277 1.9~1.10)、第V章 (p.761 1.6~  
1.9) に丸山薫先生を愛知大学に招いた経緯  
が記され、第II章 (p.265) [表II-12]「昭和  
三十四年度短期大学部文科(女子短大)時間  
割」には丸山薫先生のお名前がある。

現在愛知大学同窓会短期大学部部会長の  
小濱恵氏(1972年卒)は実際に丸山薫先生  
の授業を受講され、先生は温厚な方で、授業  
の時にもトレードマークのベレー帽をかぶり、  
いろいろな詩人の詩を取り上げて、読み  
解いていく授業だったと記憶されている。  
先生と女子学生とのやり取りは、『丸山薫全  
集 4』所収「調理のモラル」(p.117~p.119)  
からうかがえる。また、同書所収「シュベル

ヴィエルの詩」(p.482~483)には次の記述  
がある。

この詩の感想を女子短大のテストに  
出題したら、ほとんどの学生が自然破  
壊と公害追放の通念に結び付けて答え  
ていた。だがそれだけではあまりにも  
読みが浅い。

『四季 終刊 丸山薫追悼号』所収、杉浦  
明平(小説家、評論家)「思い出すこと」  
(p.108)には次の記述がある。

わたしには大学教授などという職業は  
とてもつとまらぬが、丸山さんはずっ  
と愛知大学教授をしていた。もちろん、  
丸山さんの講義も教育も独自のやりか  
たで、いわゆる教授の講義ではないと  
いう噂は本当だったろうが、いつか何  
かの機会に「それにしても、よくやりま  
すねえ」と丸山さんにいったら、丸山さ  
んは昔どおり鷹揚にわらって、「大学に  
務めていてありがたいのは健康保険が  
あることで、病気をしても金がいらん  
からなあ」とだけ答えた。丸山さんはあ  
まり強い言葉ではっきりとものをいう  
人ではなかったような気がする。

『丸山薫全集 5』所収 1950年11月2日  
付渡辺花子様宛書簡 (p.122)には以下のよ  
うに記されていて、当時の社会情勢に対し、  
人として教師として先生の熱く激しい思い  
があふれている。

私の考としては、そもそも学園内に武  
装した警官などを導入して、かれらの

力によって教え子たちを鎮圧させると  
 ゆう政府や大学当局の態度こそ腑に落  
 ちぬことです。いったい教授たちは学  
 生をなんと心得ているかと言いたくな  
 ります。(中略) 学生をして学内を恣に  
 占領せしめよ。教授たちは断乎として  
 その不当に対して口頭と態度を以て対  
 せよ。果して彼らは先生達に投石し、ガ  
 ラスを破り、机とイスを叩きこわした  
 でしょうか。思想には思想を以てせよ。  
 いわんや、学生達はみなインテリゲン  
 ツアだ。なにを仕出かすもんですか！  
 現に名古屋大学(旧帝大)の学長は身を  
 以って学生群に向って懇々とその不心  
 得をさとし、その熱意と温情によって  
 かれらは自発的に開散したと言います。  
 斯くてこそ真に教育者のとるべき態度  
 です。

そして、同書 1954 年 6 月 6 日付渡辺花子  
 様宛書簡 (p.126) には、「こんど教授という  
 ことになりました。辞令をもらって帰って  
 くと、女房が大笑いしました。」とあり、  
 失礼ながら微笑ましい。

先生は卒業論文の指導もされていたが、  
 『蟬川襟記』の「アテ字の世代」(p.14~15)  
 に次のように苦言を呈されている。

さる大学の国文学科学生の卒論で論旨  
 も通り一応の出来ばえなのに、文中再  
 三「当然」が「当前」と書いている。審  
 査にあたった先生がそれを指摘すると  
 「ハア、そうですね」と、それこそ当り  
 前のような表情だった。

しかし、誤りを全否定するのではなく、「言

葉についての感覚は時代とともに移り変わ  
 ってゆく」、「皮肉ないい方だが、いまにこれ  
 らのアテ字の中から一つ二つは本物にとっ  
 て代わるものが現れるかもしれない。」と述  
 べているところに先生の優しさを感じる。

ところで、丸山薫先生は体調不良の際、自  
 ら講義の代講依頼をされている。

例えば、『四季 終刊 丸山薫追悼号』所  
 収、野田宇太郎(詩人)「飛翔」(p.211)に  
 次のようにある。

お見舞ひのほかには用件もあった。それ  
 は丸山さんが二十年来教授をされてあ  
 る愛知大学で、今年は病気がちで一度  
 も出来なかった講義の代講を、わたく  
 し引き受けることについての打ち合  
 はせだった。その前明治村で『四季』の  
 会が催されたとき、大学の講義が滞り  
 勝ちだといふことは丸山さんから聞いて  
 ゐた。丸山さんの受持ちは近代詩と  
 近代日本文学だといふことだった。そ  
 のときわたくしは丸山さんのやうなす  
 ぐれた詩人から直接講義を受ける学生  
 達の幸福を考へたりした。

文学部助手の当時、丸山薫先生のお宅に  
 学生の卒業論文を届けていたという愛知大  
 学名誉教授黒柳孝夫先生に伺ったのだが、  
 愛知大学文学會編「文學論叢」第 53 輯(1975  
 年 3 月)所収「丸山薫教授の死を悼む」に  
 は、「また、先生は亡くなる直前まで御病氣  
 のために講義ができないでいることを気に  
 病んでおられた。そして、後任の先生に野田  
 宇太郎氏を紹介され、去っていかれた。最後  
 の最後まで、お世話になった。」と記され、  
 愛知大学文学會として丸山薫先生への感謝

の意が記されている。

先生は「愛知大學新聞」1951年6月9日号に「クローバーに」という詩、「愛知大学学園祭パンフレット」(1961年11月)に「人生の中の詩」という文章を寄稿されている。(いずれも『丸山薫全集 4』所収)

さらに、ここに記しておきたいのは、『丸山薫全集 5』所収、1963年1月24日付八木憲爾様宛書簡 (p.198) である。

大学といえば十三人の愛大生の雪中捜索も天下の話題となりました。いろいろな問題をふくむこの種の事件を、いたずらにロマンチックに考えるのは、もとより慎しむべきですが、みんな存外にきれいな形で死んでいるのではないかと、そんなイメージから詩が出来上りました。しかし発表したものかどうか、迷っています。

とあり、詩の確認はできていないが、薬師岳で命を落とした学生たちへの思いがわかる。

#### 4. 「愛大文学」「愛知大学文学研究会」

「愛大文学」は学生サークル「愛知大学文学研究会」が発行していた冊子である。(資料1・2参照)

私が入学した当時、学生会館にサークル室があり、様子を見に行った覚えがある。その時、「愛大文学」を見せられ、その場で作品を読んだが、自分にはこのような文章を書く力がないと思ったことを思い出した。

「愛大文学」の前身は「若芽」(1951年創刊、6号まで発行)と「子実体」(1957年創刊)で、1960年に「愛大文学」という名称になり、それまでの通巻数により第9号か

ら発行された。愛知大学図書館には「子実体」創刊号、「愛大文学」第9号から第23号、第25号、第26号が所蔵されているが、「愛大文学」がいつまで発行されたのか、文学研究会が現在も存在するのかは調査できていない。また「群」という冊子も発行されていたようだが、実物を確認できていない。

1961年10月に発行された第10号の編集後記によると、丸山薫先生は1961年度から文学研究会の顧問兼相談役になられ、巻末の会員名簿にお名前とご住所が明記されている。ご多忙だったであろう先生がなぜ顧問兼相談役になられたのか経緯はわからないが、学生たちが真剣に文学に取り組んでいる姿、考え方に共感されたのではないだろうか。先生はかなり積極的に関わっていらっしゃったようで、第11号(1962年11月発行)の編集後記に、

顧問の丸山先生も、しばしばおっしゃることだが、愛大などでは文学をする学生は少なくて「篤志家の部類」に属するのか会員の数も丁度いい程度で、いっこうに増えも減りもしない。

と記されている。また、第12号(1963年発行)の編集後記には、

これでは、丸山先生から「高校生でももう少しましなものを書きますよ」とおしかりを受けても致し方ないという状態だ。

さらに、先生のご尽力により1964年度に小田実氏(作家)、1965年の第十九回学園祭に伊藤整氏(小説家、詩人)を招き、講演会

及び座談会を行っている。1972年度には後に愛知大学に着任された北川透氏(詩人)が「詩の<主体>と<真実>」と題して講演をされている。『四季 終刊 丸山薫追悼号』所収、田宮虎彦(小説家)「丸山さんのこと」(p.101)に次の記述がある。

昭和四十二年初夏の頃であったか、はっきりした記憶はなくなっているから、もしかしたらもう少しあとのことであったかもしれないが、丸山さんからお手紙をいただいた。それは、丸山さんが関係しておられた大学の秋の文化祭で私に講演することを求められたものであった。

また、同書所収、津村秀夫(映画評論家)「豊橋市多米町蟬川」(p.204)にも

実はその夏の二度にわたる豊橋行きは、愛知大学で映画演劇論の集中講義をするためだったが、これも丸山さんからたのまれたものである。

とある。

『丸山薫全集 5』所収 1962年11月27日付城山三郎様(小説家)宛書簡(p.196)には、

先日は御旅行前の御多忙のさなかをわざわざ反対の方向までお出向き下さって、学生たちに結構なお話をしていただいで有難うございました。作家を招く事など殆どなく、みんな珍しさと興味をもってお話の内容に耳をかたむけた様子で、主催者側もいたく満足し

ていました。重ねて御礼申し上げます。

とあり、丸山薫先生が愛知大学の学生のために自ら講演の依頼をされ、尽力されていたことがわかる。

丸山薫先生が亡くなったのは1974年10月21日だが、同年12月発行の「愛大文学」第21号に先生と旧三高で同級生の当時愛知大学仏文科教授の山崎知二先生が「丸山さんの絶筆など」を寄稿され、「丸山薫先生の死去を悼む 愛知大学文学研究会」には、

先日、山崎先生原稿の中にある、絶筆となった<色紙>の写真の撮影のため丸山先生のお宅にお邪魔したが、三四子未亡人に<故人は学生さんに呼ばれて一緒に酒を飲むのを楽しみにしていました>という言葉をいただいたことがいつまでも心に残っている。ぼくらの世代になってからは、そんな事も少なかったが、文学研の先輩諸氏などとはよく酒をのみながら騒いでいたそう。

とある。

愛知大学文学研究会会員の中で、特に後藤紘氏、清水(旧姓高野)宏子氏との交流は在学中から卒業後もずっと続いていたようだ。

『丸山薫全集 5』の1969年3月20日付渡辺花子様宛書簡(p.160)に、以下の記述がある。

十五日あなたがおたよりをしたためておいでの時刻、蒲郡から水中翼船で伊勢湾を横切って鳥羽へ向ってしまし

た。山妻と大学の若い先生夫妻との四人連れでした。

鳥羽国際ホテルのフロントに、むかし教えた女子学生が働いていて、ぜひ一度来てくれというので行ったのですが、(以下略)

「大学の若い先生夫妻」とは後に愛知大学名誉教授になられた清水一嘉先生と宏子様ご夫妻、「むかし教えた女子学生」とは『丸山薫全集 5』所収 1969 年 4 月 15 日付書簡 (p.218) の山本磧子様 (愛知大学文学研究会会員) のことではないだろうか。追伸として「これからシーズンで、外人客はともかくとしてあなたを悩ます新婚のカップルも多いことでしょう。ポツとなってミスのないように祈ります。」と記されている。

同書所収 1969 年 8 月 3 日付清水宏子様宛書簡 (p.246) には、

アポロ 11 号が地球へ帰る速力と、竹取姫が月へ戻ってゆく速力と、いずれが勝れるや? アームストロング船長が月面へ到達せることと、宏子さんが赤チャンを生んだことと、いずれが勝る偉業なりや? おめでとう!

と記し、ユーモアたっぷりに教え子の幸せを喜んでいらっしゃる。

さらに、1971 年 9 月 12 日付牧野芳子様 (詩人) 宛書簡 (p.264) には、

私たち夫婦が頼まれ仲人をした若い助教授夫妻—細君は創作サークルにいて学生時代から拙宅に出入していました—が、三才になる女の子と一緒に昨

日午前、一年留学でロンドンに発つので、コッソリ病院を抜け出して駅まで見送りにゆきましたら、なんだか無性に小生も海外へ行きたくくなりました。

とあり、先生の温情にあふれた行動に驚く。ちなみに、清水一嘉先生は『丸山薫全集』の編注等をされていらっしゃる。

## 5. 愛知大学短期大学部学生歌「梢の歌」

「梢の歌」については、2019 年 12 月 15 日に安智史教授が短大 60 周年記念講演「丸山薫と愛知大学短期大学部学生歌『梢の歌』をめぐって」の中で、この詩は 1964 年に作られ、丸山薫先生がこの詩に対しどのような思いであったか述べていらっしゃる。詳細は講演記録が愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.28』(2020 年 3 月) に収められているので、参照したい。

安先生もおっしゃっているが、「梢の歌」に学校名は登場しない。女声合唱団の活動の中で幾度も「梢の歌」を歌ったが、学校名がないことでかえって誇らしく感じながら歌っていた。この度、あらためて「梢の歌」の言葉を読み返し、歌詞の中の「不安」に「おそれ」、「未来」に「あす」、「希望」に「のぞみ」とルビが付されているところに丸山薫先生の学生への温情を感じた。

ところで、私が文学専攻科に在学中、丸山薫先生と同じく現代詩を代表する詩人、北川透先生が愛知大学に赴任されていて、先生のご厚意で村上春樹、吉本ばななの小説を輪読する時間を持てた。星野昌彦先生宅でお話を伺った際、「丸山薫先生と北川透先生は、文学史に確固たる位置づけをした詩

人である」とおっしゃった。その言葉に心が震え、昨年7月、大胆にも北川透先生に「先生は詩人丸山薫をどのように評価されますか。」など書いた手紙を送ってしまった。9月になって、思いがけず北川先生からお便りを頂戴した。中原中也の会・「中原中也研究」編集委員会編『中原中也研究第20号』（2015年8月）が同封されていた。その中には2014年6月7日に愛知大学豊橋校舎で開かれた中原中也の会第18回研究集会の北川先生の講演「海に人魚はいないかー丸山薫と中原中也の〈幼年〉をめぐって」が収められており、次のように述べられている。(p.64)

そして、丸山薫は昭和十年代の「四季」派の詩人として通っていますが、それより以前の丸山は、まさしく日本におけるモダニズムの詩の運動の渦中にいた詩人でした。

便箋3枚に手書きでしたためられた先生からのご指摘とご助言に目が覚める思いであった。以下に一部を記す。

ぼくは丸山薫の「梢の歌」は知りません。合唱曲の歌詞と詩とは全く別のものです。丸山さん自身が詩人として、それを明確に区別しています。丸山さんのことを知りたければ、全集を徹底的に読み抜くこと以外にありません。丸山薫さんについての個人的な回想は、半分はつくり話です。そういうものを信じてはだめです。詩人は人柄や美辞麗句の入った歌詞をいくら読んでもわかりません。歌詞も参考になりますが、

まずもって詩集を誦<sup>そら</sup>んじるほど読み抜くことです。そうすればあなたの丸山薫像は見えてきます。丸山薫さんは近代詩の中で大事な詩人ですが、ぼくは個人的に好きな詩人ではありません。

北川先生が指摘されたものとは違うかもしれないが、『丸山薫全集4』（1977年 角川書店）「評論I」の「作詩と作詞」（p.378）に次の記述がある。

つまり、作詞も作詩も共に新鮮を競うべきではあるが、歌の場合はあくまでも感情に添って発想し、言葉も感情に添って流れねばならぬということである。ウラを返して言うなら、詩のように批評精神に立って発想されたり、言葉に暗喩やイメエジをもたせることを第一義にしてはならないということである。

私は「梢の歌」には丸山薫先生の愛知大学の先生として、また文学研究会の顧問として接していた学生たちへの思いが込められていると思う。学生たちが日々悩み、不安を抱えながらも学友や先生がたと交流し、夢、希望、目標に向かって羽ばたいていくことを願う先生からのエールである。

「梢の歌」は詩碑のそばに設置されたパネルにあるQRコードから聴くことができる。愛知大学学生歌や他の校歌も丸山薫先生とのコンビで作曲された山田昌弘先生による「梢の歌」のメロディーは、抒情豊かで壮大な音楽である。ご存じない方にはぜひ聴いていただきたい。

## 6. おわりに

拙稿をまとめるにあたり、人とのつながり、ご縁というものに感謝し、愛知大学の卒業生として誇りを感じている。

私は丸山薫先生の詩の中で、「小鳥達」(『丸山薫全集 3』p.411~p.412 所収)、「小鳥の歌」(『丸山薫全集 2』p.26~p.27 所収)が好きだ。小さき鳥たちの生命力を感じる。また、「燕はとんでくる」(『丸山薫全集 2』p.28~p.30 所収)の中の「<sup>うつ</sup>点の二つの瞳には地球の半分が映っているのだ」という描写に宇宙への壮大な広がりを感じる。『丸山薫全集 2』所収(p.11~p.12)『青い黒板』の「はしがき」は少年少女に向けた先生のエールだ。今後も時間をかけて丸山薫先生の詩に触れてみたい。

2019年12月15日、「梢の歌」詩碑の除幕式直前に短期大学部長龍昌治先生のおかげで所在不明になっていた女声合唱団の団旗が見つかった。女声合唱団 OG の一人として、これからも「梢の歌」を大切に歌っていききたいと思う。

## 謝辞

拙稿のきっかけをくださった越知専氏、藤城佐知子氏、貴重なお話をしてくださった星野昌彦先生、黒柳孝夫先生、安智史先生、清水宏子氏、山口恵里子氏、小濱恵氏、正太寺ご住職大河内悟道氏とお母様に心より感謝申し上げます。また、北川透先生には『中原中也研究第20号』、元愛知大学短期大学部事務長の犬塚洋子氏には『四季 終刊 丸山薫追悼号』と『蟬川襖記』、愛知大学文学研究会会員だった株式会社三愛企画代表取締役の堀本貞臣氏には「愛大文学」第13号・第14号をいただきました。誠にあり

がとうございました。そして、コロナ禍にあつて、愛知大学図書館の利用がままならぬ中、資料検索の依頼を快諾しサポートしてくださった愛知大学非常勤講師の高木秀和先生に深く感謝いたします。

## 参考文献・引用文献

- 桑原武夫他編『丸山薫全集 1~5』角川書店  
1976年~1977年
- 岩本晃代・安智史編『新編丸山薫全集 6』  
角川学芸出版 2009年
- 丸山薫『蟬川襖記』潮流社 1976年
- 愛知大学丸山薫の会編『丸山薫の世界  
(丸山薫作品集)』2017年
- 潮流社編『四季 終刊 丸山薫追悼号』潮  
流社 1975年
- 丸山三四子『マネキン・ガール 詩人の妻  
の昭和史』時事通信社 1984年
- 中原中也の会・「中原中也研究」編集委員会  
編『中原中也研究第20号』2015年8  
月
- 愛知大学五十年史編纂委員会編『愛知大学  
五十年史 通史編』2000年9月
- 愛知大学東亜同文書院大学記念センター編  
『同文書院記念報 VOL.28』2020年3  
月
- 愛知大学国文学会編「愛知大学国文学」  
第十三号(丸山薫教授特集号)1972年  
12月
- 愛知大学文学會編「文學論叢」第53輯 1975  
年3月
- 愛知大学企画部広報課編「愛知大学通信  
VOL.217」2020年3月
- 愛知大学文学研究会編「子実体」創刊号  
1957年10月
- 愛知大学文学研究会編「愛大文学」第9

号～第23号、第25号、第26号 1960年～1986年

資料1「愛大文学」第13号・第14号表紙

久野 かおる (くの かおる)

昭和 62 年 愛知大学文学部文学科国文学専攻卒業

昭和 63 年 愛知大学文学部文学専攻科国文学専攻修了

平成 10 年 愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース修士課程修了

平成 13 年 愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース博士課程満期退学

令和 3 年現在 学校法人茶屋四郎次郎記念学園 東京福祉大学名古屋キャンパス 留学生日本語別科主任講師



資料2「愛大文学」第13号 (p.31) 卷末より

## 文学作品批評会 (読書会)

内外の文学作品を自由に取りあげては、毎週一度、読書会のかたちでお互いに読み合い、批評し合う。その中から、文学への正しい姿勢を身につけようとする。これが私たちの行っている、文学作品批評会の目的です。本誌の批評もその都度行なっています。

## 入会の手びき

▼本会は、文芸作品の創作を中心の目標に活動しています。古典講読の如きは行いません。「国文学研究会」や「英文学研究会」さんと異なるゆえんです。

▼従って雑誌「愛大文学」を発行することが一番大きなことです。但し、読書会を毎週一回、他に文学者を囲む座談会、文学旅行、映画鑑賞等を行なっています。

▼入会金は必要としませんが、会費は毎月七五円です。名古屋分校、女子短大、夜間部などの諸君は会友として迎える用意があります。

△入会受付は随時、学生会館・文学研究会室